

Platform

特集

仮想の

夏

君がいないこと以外、
完璧な電子の夏。

station

- VRChat : nagisa no machi
- cluster : 清流の夏 in a summer brook
- NeosVR : NeosFesta4
- Real.W : 平泉・高館

Platform Vol.2 contents

Gravure:nagisa no machi yoru	4	
nagisa no machi VRChat	12	
清流の夏 in a summer brook cluster	18	
ペトリコール	コラム	22
NeosFesta4	NeosVR	24
平泉・高館	Real.W	30
あとがき		34

第2号のテーマは「夏」。

夏は不思議な季節で、時間帯で印象が変わる。昼は明るく活動的でも、夕方はどこか不安で、夜はなんだか後ろ向きになる。

では、時が止まったVR空間の夏は？ ずっと活動的なままなのか、あるいはずっと不安だったり、後ろ向きだったりするのだろうか。

これが発行される頃、リアルワールドは秋と冬の境目だろう。そんな季節のギャップも感じつつ第2号を読んで頂きたい。

編集長

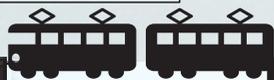
世界には、色々な町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

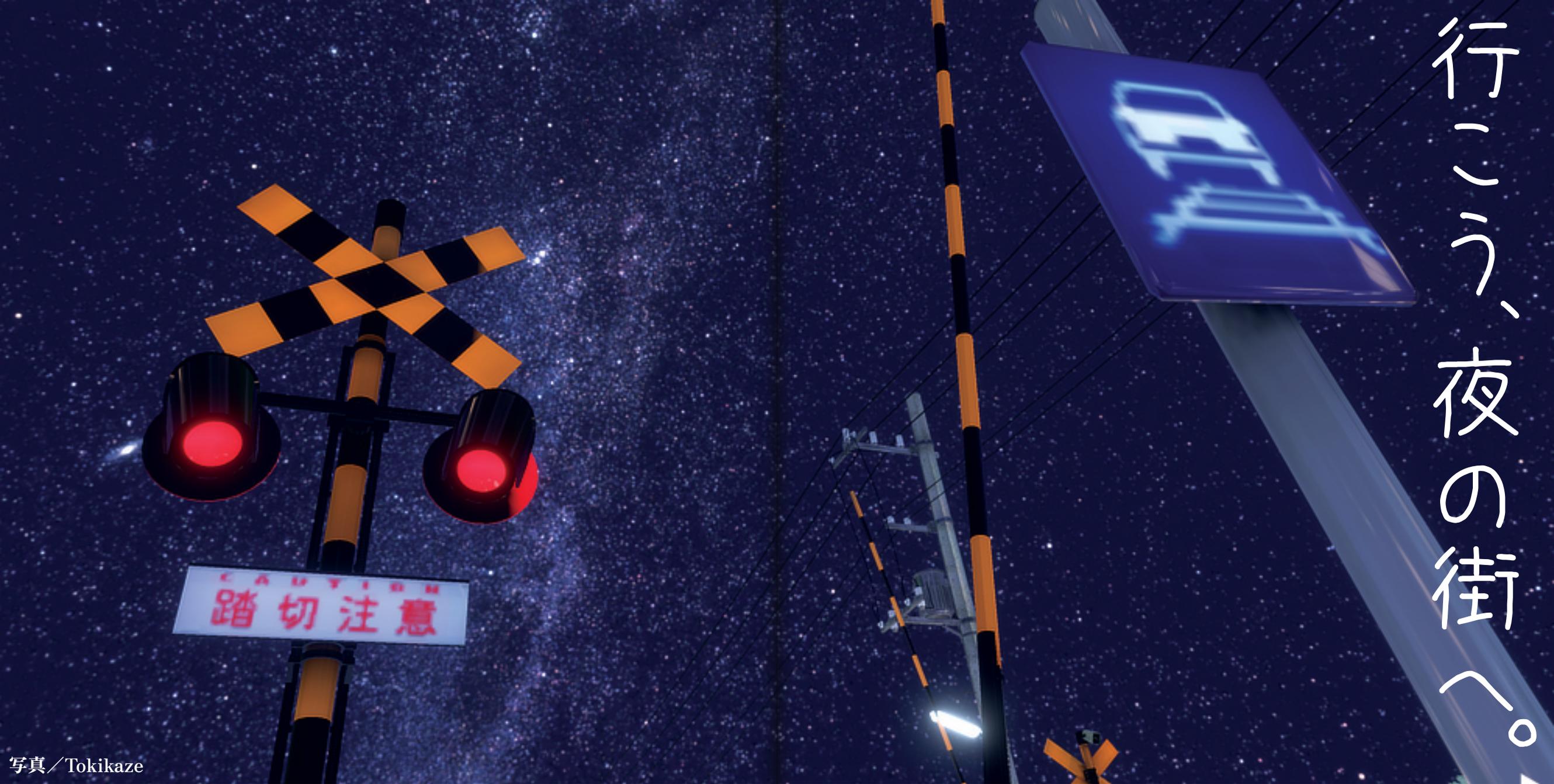
どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。

……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」



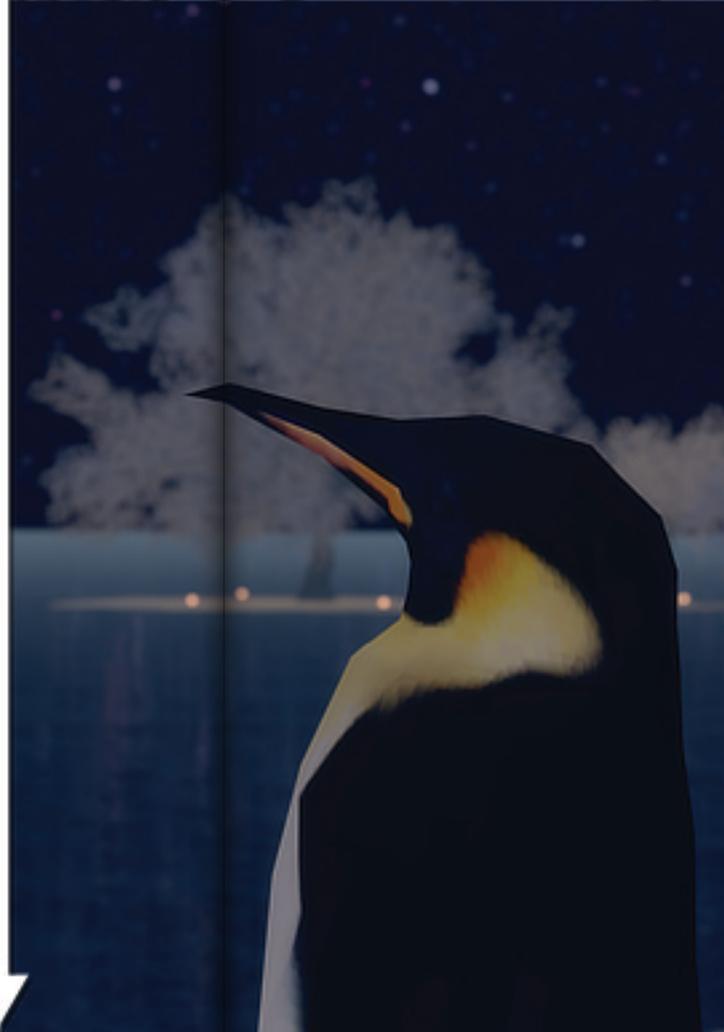


行く、夜の街。

写真/Tokikaze







街に夜が来る。夏は終わらない。



world: nagisa no machi yoru Created by: iyoroken



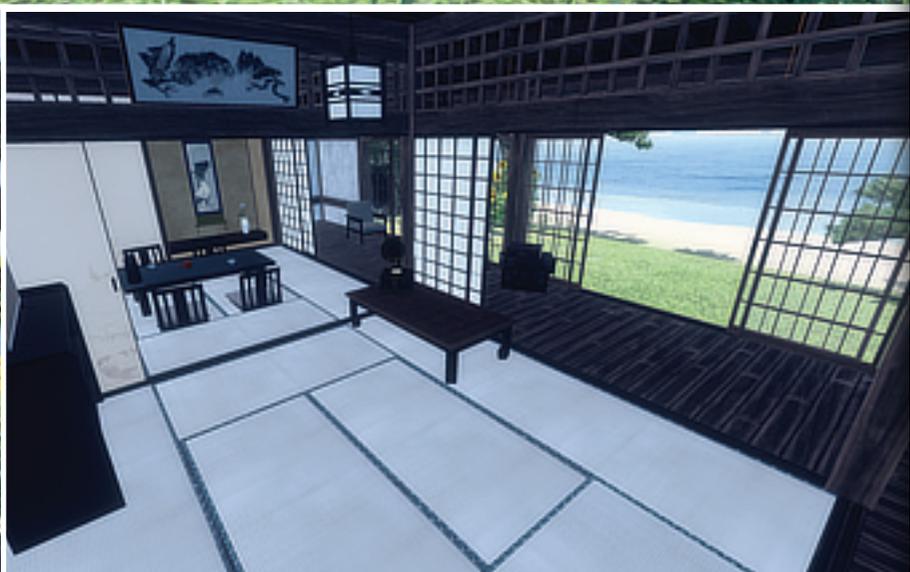
nagisa no machi

The new VRChat summer



nagisa no machiのVRChat上のワールドは、その名前の通り浜辺の町に佇む二階建ての日本家屋から始まる。一階には、板張りの外廊下に囲まれた六畳間の部屋が二つ、襖で区切られており、長方形のちゃぶ台の上には湯呑み茶碗とポットが置かれている。海側の障子とその反対にあたる玄関は開きっぱなしになっており、夏の間は潮風を通りやすくしている。おそらく、外廊下という構造上、エアコンをつけることが難しく、夏の間はこうすることで涼をとるのだろう。

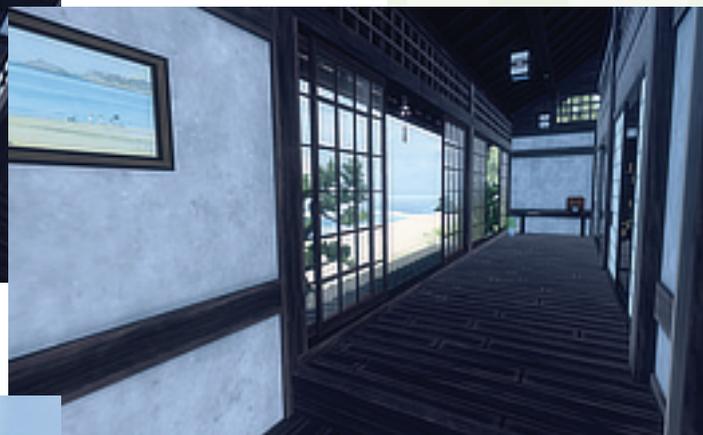
二階に上がると、一階とはまた様子が変わってくる。畳敷きではなく板張りの部屋には、壁





こう岸のビル群だけではなく、このワールドには「向こう側はどうなっているのだろうか……？」と疑問に感じて進んでみると、絶対に到達できないポイントがいくつも存在する。

日本家屋の玄関から外に出ると、高度経済成長期に建てられたと思



このレールの先をどこまでも歩いたとしても、このワールドは空中に



われるブロック塀の壁に囲まれた一軒家や二階建ての鉄骨アパート、魚屋や神社が並び、昭和末期の頃の住宅地の風景を連想する。夜になると神社で小さな夏祭りが開かれるのかもしれない。少し歩くと、高架化されていないローカル線の駅があり、鉄道のレールがどこまでも続いている。



浮かぶ島だから、いずれは断崖絶壁に辿り着いてしまう。鉄道の踏切の向こう側の電信柱が延々と立ち並び、国道、山の中に突然現れる飛行場で軌道エレベーターを向いている複葉機……これらは全て、同じ想像力を掻き立てる装置とも言える。「向こう側はどうなっているのだろうか……？」と。

この「向こう側」を巡る想像力



「海の向こうのビルには何があるのだろうか……」そう思って、海底をひ

たすら歩くと、ビル群の手前には奈落が広がっており、絶対に向こう側のビル群に到達することができない。奈落に落ちると無限に落下してしまい、元の日本家屋にリスポーンする。もしも、あなたが落下しながら上を向いたとしたら、そこで初めて知ることになるのだろうか。（容量制限という実用的な理由もあるだろうが）nagisa no machiは夏休みの風景を散りばめている、空の上に浮かぶ島であることを。

日本家屋の二階から覗き見れる向



は、時間に制限のない夏休みの暇つぶしに発揮される。私も、小学生の頃、国道がどこまで続いているのかが気になって、一人で自転車に乗って走ったことがある。

前輪の籠の中にフェイスタオルと冷凍庫で凍らしたポカリスエットのペットボトルを放り込み、炎天下の中、顔から汗が噴き出るのも構わず、ひたすら国道を走った。結局、車以外で通行すると危険なトンネルに差し掛かったため、それ以上進むことを断念したが、そのような無謀かつ楽しい想像力を発揮できるのは、夏休みならではと言える。お盆より前



の夏休みには、時間が無限にあると錯覚させる何かがある。

ただ、無限に続いていたはずの夏休みも、お盆に田舎の墓参りを済ませて実家に戻り、七月の終わりに学習机の上に放置していた漢字ドリルを発見する頃から、徐々に終わりの輪郭が形を伴ってくる。あと、夏休みは二週間ほどしかない。その頃から、まるで一夏の魔法が解けてしまったかのように、私達は夏休みの終わりへと宿題の進捗のことしか考えられなくなるのだ。

無限に感じる夏休みがやがて終わ



のだ。

ある意味において *nagisa no machi* は、浜辺の日本家屋や昭和の街並みなどのノスタルジックな夏のフレーバーを散りばめただけではなく、この夏休みの切なさの本質を体現したワールドとも言える。

向こう岸のビルはどうなっているのか、この線路はどこまで続くのか、この国道沿いに歩いて行くとどこに到達するのか、この複葉機に乗って軌道エレベーターに向かうことができるのか。そういった「向こう側」の想像力を掻き立て、そしてそこに到達できないことを知る経験は、大人になってからすることが難しい。旅館と新幹線の予約を事前に行い、

旅行雑誌や現地のお店の食べログなどの評価を調べて、いずれは終わる夏休みを最大効率よく楽しめるようにスケジュール管理をしてしまう。ただ、風景の変化がほとんどなく時間が無限に続いている *nagisa no machi* は、そのような夏休みの旅行計画を立てる必要はない。そういう子供の頃の貴重な感覚を味わえる *nagisa no machi* は、どこまでも続くはずの鉄道レールをフレンドと散歩して、あの頃の「向こう側」の続きを誰かと楽しむのは、仮想現実ならではの良い夏休みの過ごし方と言えるだろう。

(文..wak)

ることは、夏休みの切なさの本質だ。大人になってから夏が特別な季節ではなくなるのは、私達が既に夏休みは終わるものだと知っているからである。だが、人生において、夏をあまり体験していない子供にとって夏は終わるものではない。まるで無限のように感じる夏休みは、ある日突然、有限なものに姿を変えてしまう



nagisa no machi (作: iyoroken)

ACCESS in VRChat

To the next PLATFORM.



メイトクラブで 4分33秒を踊るような

清流の夏 in a summer brook

人生百年と言われるが、その百回しか来ない夏のうち、何回目の夏が一番楽しくなるのかと、ずっと考えていた。

夏という季節は、他の季節に比べても「音」に付随する思い出が多いように思う。夏の音と聞いたらまずは蝉の声。それからプールや海に行ったときのほじける水の音。テレビの高校野球で「正しい青春」を極めた高校球児たちが鳴らす快音と応援席にいる楽団の鳴らす音。ひぐらしのなく頃には夏が終わりはじめ、コオロギが鳴くようになれば季節は秋だ。

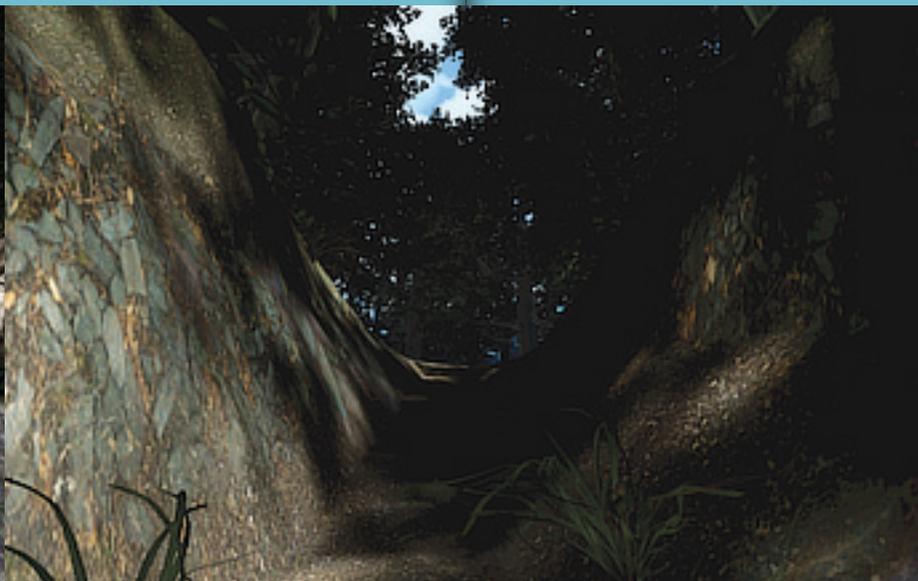
春は音というより色彩の鮮やかさで印象付けられる。桜の桃色、新緑の緑。秋は肌で感じる温度から徐々に冬に向かっていくことを知る。冬は静寂に包まれた季節だ。雪があらゆる音を吸いとりに、雪が降らないような地域でもなんとなく、年末年始は厳かな気持ちで静かに迎えたであろう。クリスマスやハッピーニューイヤードで、若者の街には大きな音が響き渡るが、それは人々が交流する中で生み出される喧騒であり、夏が用意してくるような、偶然性をはらみながら聞こえてくる自然の音ではない。

ともあれ、少なくとも私にとっては、夏の印象は「音」に結びつけられている。

この夏と「音」の結びつきというのは、VRの世界でもよくあるものだ。というより、むしろより顕著だ。人気のワールドでは幻想的な「夏」にあわせた、いわゆる「エモい」BGMがワールド全体に流れていたりする。ビーチのワールドではリアリティのある波の音がするところは多いし、概念の中にしか存在しないようなひまわり畑にも蝉の声がしたり、やっぱりここでも「エモい」BGMが流れていたりする。

そういう場所で、人工的なノスタルジーに浸るのもいい。だが「VRは現実ではできないことが出来る場所」というふれこみを信じるならば、ここは反対に、「音のしない夏」を創り出してみようと思った。





色々なワールドが候補に挙がるが、今回やってきたのは「清流の夏 in a summer brook」だ。いわゆる川のキャンプ地のような場所であり、滝があり、水場があり、緑があり、炊事場があり、飯盒炊爨ができるように見えている。川の近くではせせらぎの音が聞こえ、ワールドにBGMがかかっている。

リアルワールドだったら、こういう場所はうるさくて仕方がないだろう。滝は轟音を垂れ流しているし、その水はサラサラと川になって流れていく。木々が生い茂っているのだから虫の声は昼夜と絶えないだろうし炊事場があって飯盒炊爨が出来るなら調理の音や炎の音も鳴っているはずだ。その一切を今から消す。

メニューを開き、「音量」を開く。そして一気に音量をゼロにする。当たり前だが全ての音が消える。遠くにわずかに聞こえるのはリアルワールドのエアコンの音だけだ。

とりあえず歩き出す。歩くときの地面の音はない。こんなに木々が生い茂っているのになんの音もしない。川のそばに行ってもただ透明の何かが緩やかに流れているだけにみえる。滝からは水が落ちていているのに静かだ。なんと

なく無重力な感覚さえ覚える。キャンプ地の方へ行き、炊事場に行く。視界では仮想の炎が赤々と燃えているにもかかわらず、リアルワールドなら鳴るはずのパチパチという木が燃える音が一切しない。

音がない、つまりそこにあるべきはずの、あって当然のものがいないことで覚えたのは喪失感と強烈な違和感だった。まるでナイトクラブでケージ4分33秒を踊るような、目の前にあるのに遠くに見えるような音の騙し絵の中にいるようだった。初めて経験する「夏」だった。

無音の「夏」というあり得ない体験をして、この奇妙なチグハグ感こそ「VRは現実ではできないことが出来る場所」という事態を最も的確に表しているのではないだろうか。と考える。どうしてもVR体験は「現実に存在しない何かがある」ということに重きを置かれがちだが、本当は「現実に存在するはずの何かがない」体験ができる貴重な場所なのだ。

HMDを外せば、夜中だというのに虫が元気だ。コオロギの鳴き声が聞こえてくる。もうそろそろ秋か。



百回やってくる夏の中でも、一番楽しいわけではないかもしれないが、一番「夏」とは何かを考える夏になった。

(文：ニッソ編集長)



清流の夏 in a summer brook (作：かおも#)





column

ペトリコール

ペトリコールという言葉がある。雨が降った時に感じる、あの独特の香りを指す言葉だ。この言葉を記事の文中で見つけた時、私はいつも一つの風景を想起してしまう。

うんと背を伸ばした真白の日と立ち昇る入道雲。そこへ慌ただしく飛び込んできた雨雲がばた足をしながら通り過ぎていく。一時の森閑。地面には陽炎の絨毯。湿り気を帯びた深く煎ったコーヒーのような香りが鼻を擦る。声を潜めていた蝉が波のように羽を振り始める。緑は日に向かい深呼吸し始め、一層輝いて見える。冷や麦に湯をかけたように周囲の空気が蕩け始め、頬を伝った滴がもう白んでいる地面に落ちる。

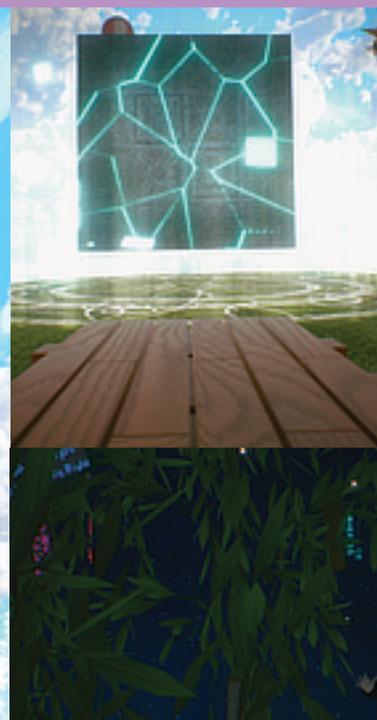
私はこの浮かんでくる風景を知らない。覚えていないのかもしれない。私の作りだした妄想なのかもしれない。けれどもそれはとてもリアルで、肩に広がるじっとりとした汗や少し酔ったような調子で聴こえる蝉時雨や、微かな寂寥感を確かに覚えているように感じる。きっと記憶や感覚は文字にすら宿るのだろう。

現実であってもバーチャルであっても、踏みしめる大地の香りや風の

感触は変わらないものだ。私は考えている。道端に降った葉を一枚手に取って、その色や形を見れば感触が無くても匂いを嗅がなくても、いつか見た林立する広葉樹の間を吹き抜ける柔らかい風や陽がふと思いつかばないだろうか。私たちは万物に類似的な記憶や感覚を想起する、してしまうのだ。知らない場所でも見たことのない場所でも私たちはきっとそこで何かを思い起こす。大地を踏みしめて、葉を見て、蝉の声を聴いて、ペトリコールを嗅いで、夏の空気を一杯に吸い込んで。懐かしい人との記憶か、窓辺に風鈴を吊るしたあの日か、初めて食べた氷菓の冷たさか、日向に咲く名も知らない花か、いや、もしかすると淡い初恋の記憶かもしれない。

あなたは今、何も予定立てていない真っ白なスケジュール帳を片手に路線図を眺めている。さあ、何処に行こうか。何処でもいいさ、あなたの鼻腔を擦る駅を選べばいい。あなたの記憶や感覚があなたをそこへ誘ってくる。この本があなたにとつてのペトリコールになれば嬉しく思う。

(文・写真…ヤマノケ)



夏といえば祭。現実世界でも、徳島阿波踊りのような伝統芸能から、コミックマーケットのようなサブカルイベントが数多く開催される時期である。メタバースにおいても同様で、有名どころだとVRChatで開催されるバーチャルマーケットが挙げられる。アバターなどの3Dデータ商品やリアル洋服、PCなどが売り買いできるイベントだ。

今回、NeosVRから紹介したいのは、筆者がアンバサダー（広報活動者）を務めた

NeosFesta 4

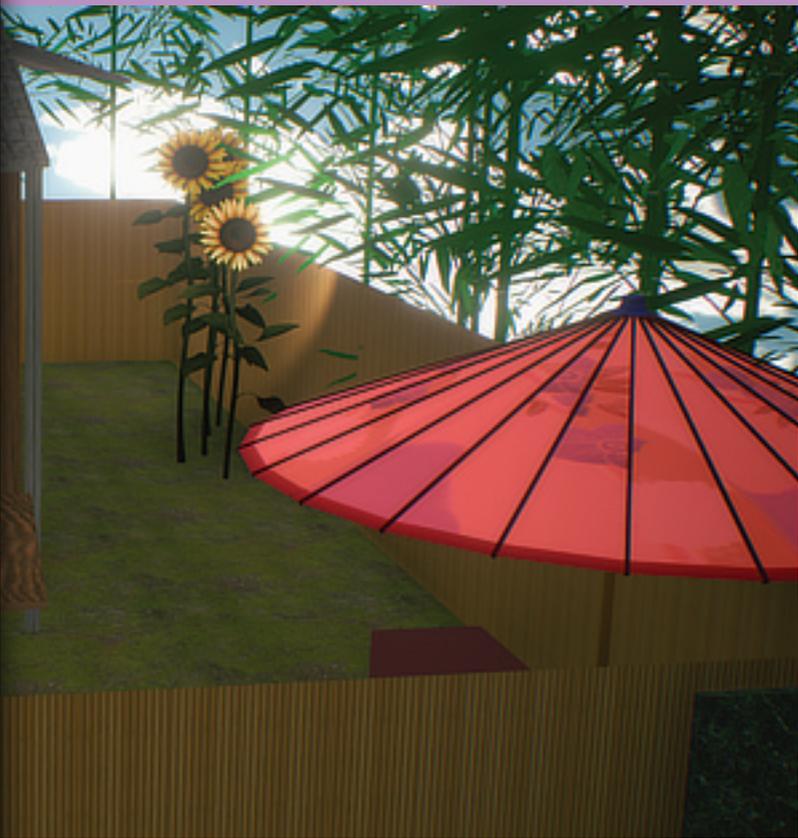
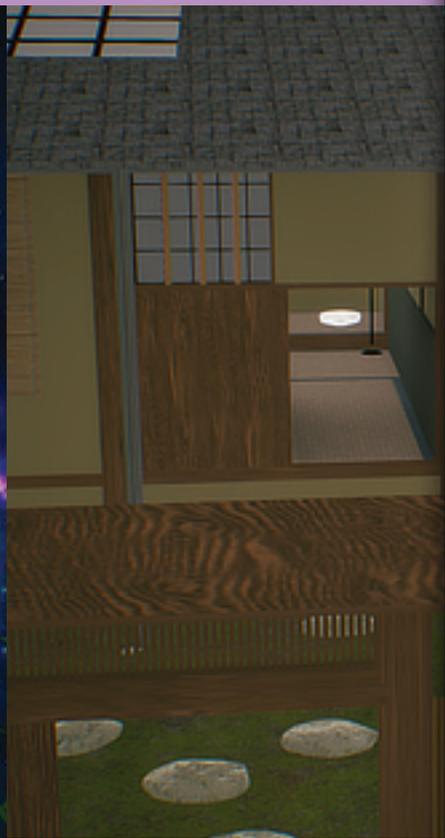


NeosFestaというメタバースの祭である。神社の傍らや市街の大通りの道すがら、祭の準備が為されている光景を見たことはあるだろうか。商品を運搬する人々や、徐々に形作られていく屋台の骨組みは、祭の高揚感を想起させる夏の風物詩。いつもの日常から『手作り』ならではの情緒が溢れ出す空間と化する。

NeosFestaならば、そう言った準備の賑やかさすら再現できる。なぜならば、Unityで作成したデータを公式HPに投稿

写真/みくにき





NeosFesta 4

……というよくある形式ではないからだ。地面や空のテクスチャに始まり、建物などのオブジェクトやパーティクルに至るまで、Neos内で作成、調整が可能である。

現実世界で例えるならば、参加者が各々自宅で出来た商品を会場に持ち込むのではなく、一同が会場に集まって商品や屋台を作るのに近い。ユーザーたちが話し合いながら、持ち寄ったオブジェクトを設置する。白いタイトルだけが末広がる世界が、徐々に賑わっていく過程を見守る感覚は、太陽の移り変わりを眺めるような感慨深さ。

実際にユーザーたちが協力して作ったワールドを一つ紹介しよう。

NeosFesta 4、つまり第4回NeosFestaに入稿された『茶室・夏ver』である。ワールド製作者たちの詳細は割愛させていただくが、ビルディング、ガーデニング、エフェクト、アイテム、それぞれ役割分担されて作られた。

虫や鳥たちの鳴き声、時折甲高く響く鹿威し。聴いているだけで肌が火照るかのよう。木の枝や小石が散らばる写実的な地面のテクスチャに、侘び寂びを体現するように配置された向日葵や竹、飛石。田んぼ一反あるかないかの地面の端に立ち、下を覗き込めば雲海が広がっていて、その時真の意味で俗世から隔絶された空間であると悟る。茶室の中の座布団に座れば、リアル世界で飲む何の変哲のない飲み物も、きつと極上の味わいになるだろう。

ところで、こう思った御方もいる



シャンデリアがチリチリとぶつかる音や、木材が軋む音などが聞こえてくるだろう。そこはドラゴンを模した飛行船の船長室。廊下を歩き、突き当りのエレベーターで甲板に降りてみよう。向かって左斜め前にある装置を操作すれば、冒険の空に発だ。爽やかな風が吹き付けるのを感じながら、飛行船が目的地の浮島まで連れて行ってくれる。入稿されたワールドへ続くポータルのみならず、様々なツール、素材、3Dモデルなどが展示された浮島の数々へと。またエレベーターから降りた右斜め前の装置では、浮き輪や扇風機、VRアートなどのオブジェクトを直接出現させることができる。

抜けるような青空に、真っ白な積乱雲。漠然と夏の空を見上げていると、どこまでも『向こう側』へと行ってみたいくなるかも知れない。その『向こう側』への旅行が、今では可能なのだ。飛行船に乗って、無限に広がり続ける空の海を旅する。筆者は思う。それは新しくも懐かしい、多くの人々にとっての夏の心象風景になり得るものであると。

(文..sun)



NeosFesta 4



かも知れない。「技術のあるクリエイターでなければ、NeosFestaを存分に楽しめないのでは？」と。そんなことはない。同じくNeosFesta4に入稿された『Neos七夕2022』は、誰でも会場作りに参加できる。銀河を映す鏡のような水面に浮かぶ竹、その葉には願い事が書かれた短冊が数多く飾られている。

これらはイベント期間中（7月1日〜7日）に訪れたユーザーたちの願い事が、半永久的に保存されている訳だ。白紙の短冊に手書き、もしくはキーボード入力して竹の葉に飾る。NeosはVRプラットフォームの中でも、特にこのような「直感的なアクション」を得意としており、普段モノ作りをしない人でも会場作りに参加できる。

これらが展示された会場にはいつでも行ける。NeosFesta4のまま銘打たれたワールドに入った瞬間、

◀ To the next PLATFORM.



平泉高館

月日は百代の過客にして、
行きかう年もまた旅人なり。

松尾芭蕉の『奥の細道』は、留まる事なく流れる時間を旅人に見立てた、そんな一節から始まる。

八月十五日のこと。岩手県は平泉を訪ねた。台風が過ぎ、尚も曇天ながら、雨上がりの空に蝉の声が響く暑い日だった。平泉といえばかつて奥州藤原氏が栄華を極め、また芭蕉が『奥の細道』で著名な句を幾つも読んだ地だ。分けても私はこの地で最期を迎えた義経らを詠んだ「夏草や」に始まる一句がことのほか好きで、いわば「聖地巡礼」の旅だった。

岩手県第二の都市である一関からほど近く

に平泉はある。文化遺産の街だけあり、コンビニの看板も茶色に塗り込められている。道の駅平泉にバイクを止め、十五分も歩けば、句の読まれた義経最期の地、高館に着く。

拝観料を払い二、三分登ると、高台の上、義経公を祀った祠と供養塔がある。壮大な歴史の終幕とは思えない、小さな丘だ。手を合わせた後、おもむろに振り返れば、そこには一面の青田とその間を流れる雄大な北上川が望めた。台風の雨を受けて、北上川は轟々と土色に染まっている。芭蕉がかの句を読んだのは旧暦五月、「五月雨の降り残してや」という金色堂の句からも伺い知れる梅雨の時分で、もしかしたらその時も北上川はこんな風に濁っていたかもしれない。

写真／思惟かね



Real World





しかし思索の余地もその程度だ。そこには何も無い。ただ山と川と、その合間に野が広がるだけ。義経の逸話とともに幾多の物語に語られる場所ながら、その記憶を留める痕跡は何一つない。他の観光客が足早に去ってしまうのも納得だった。

そこでふと、脳裏をよぎったのは『奥の細道』の一節だ。
『三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。』

奥州藤原氏の栄華も、時の流れの中では一夜の夢に過ぎない。この地を訪れた芭蕉が目にしたのは、私と同じく何もない景色だった。しかし芭蕉はわずかに残る史跡に義経の時代の情景を幻視しつつ、姿を留めるのが山や河ばかりであることに涙して『国破れて山河あり、城春にして草青



ゆく。それでも山河は変わらずそこにあり、語り継がれる歴史を通して、私たちは先人の姿をそこに幻視し、思いを馳せ、心を同じくすることができる。そんな事に気づくため、私たちはこうして史記の中の地に足を運び、芭蕉もまたはるか六百里を旅してこの地に至ったのだろう。人が真にその地を知るには、神の視点ではなく、小さく不自由な人の身でその場に立つしかないのだ。あらゆる情景がオンラインで目にできる今の時代に、なお旅に出る意味はそこにあると思う。

ふと思えば立ち、私はバイクを走らせた。高館橋から北上川を超えて一路東へ丘を登っていく。駐車場に車を停めると、そこは翌十六日に大文字の送り火が炊かれる東稲山の中腹

みたり』と杜甫の詩を想った。

つまり私が目にして「何も無い景色」こそが、まさに芭蕉が目にした、句に詠んだ情景なのだ。私は打ち震えた。悠久の自然と、あまりに儂い人の夢。その鮮烈なコントラスト。一方で儂い人の身にありながら、いま目の当たりにしている山河を、義経が、そして芭蕉が目にしたと知り、幾百年の時を超えて彼らとの繋がりを感ずることが出来る。私の目に熱いものがこみ上げた。

高台を下れば、ほどなく芭蕉の句碑がある。その横には木々が繁り、北上川と山々を望む百代の景色を葉の向こうに覆い隠している。しかし私はその向こうに、三百年前に芭蕉が、そして八百年前に義経が目にしたこの山河を見た気がした。

夏草や 兵どもが 夢の跡

月日は変わり、流れ続ける。たとえ歴史に名を残す英傑も、私のような凡俗も儂く夏草の向こうに消えて

平泉 (岩手県西磐井郡平泉町)

高館義経堂

ACCESS
[岩手県西磐井郡平泉町平泉柳御所14](#)

営業時間：8:30～16:30
(拝観料300円)

駐車場有。詳しくはHPから
[毛越寺 - 高館義経堂](#)

平泉大文字焼き展望台

ACCESS
[岩手県西磐井郡平泉町長島](#)

駐車場より徒歩20分

※道中は山道ですので
服装にご注意ください

だ。煩いほどの蝉の声を掻き分け、額に汗しさらに十五分ほど山道を登ると、平泉大文字焼き展望台に辿り着く。平泉を一望する雄大な景色だ。ここから見渡すと、先の高館も小さく見える。こんな景色は芭蕉も見えてはいないだろう。私はえも言われぬ満足感を胸に、山を下り、帰路についた。

(文：思惟かね)



Gravure : nagisa no machi yoru station

撮影：オージュ



VR CHAT

nagisa no machi

執筆：わく
撮影：オージュ



cluster

清流の夏
in a summer brook

執筆&撮影
：ニツリちゃん



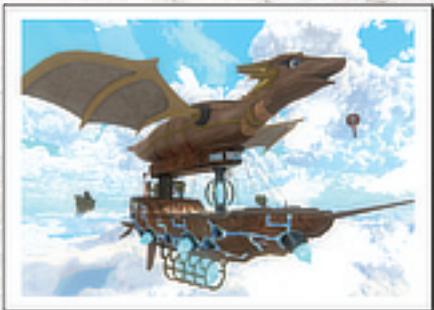
Column : ペトリコール

執筆&撮影：ヤマノケ



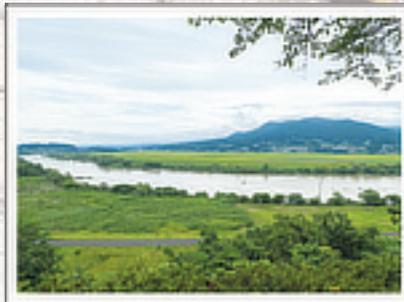
NEOS NeosFesta 4

執筆：sun
撮影：みくにき



平泉・高館

執筆&撮影
：思惟かね



感想などは
#Platform通信欄
へぜひお寄せください!

ニツリちゃん
編集長

季節という環状線はまた夏に戻ってきます。バーチャル世界ではこちらの列車へ。次の駅は「混沌/カオス」です。お手持ちの切符を無くさないように。

SUN
ライター

私事ですが、NeosVRで好きな音ゲーで曲を作る御方のDJイベントにお邪魔した時。「あのゲームの中の世界に自分がいるみたい!」と物凄く興奮して、これぞVRの真髄ではないかと思いました!

わく
ライター/校正

現実の夏の気候が不快になればなるほど、熱気も湿気も持たない仮想の「あの夏」に対する想いは深まります。今後は、そういう二重構造で夏を見ていくしかないのかもしれないかもしれません。

オージュ
カメラマン

夏になるとプールや海といった水に関わる遊びができたり、アイスにジュースにと水分が恋しくなる季節。そのせいか自分にとって夏は「水」が関わる季節という印象です。

Nag
校正

幼児を育てていると、現実の夏は開放的なイメージとは逆に(安全のため)部屋で過ごさざるをえなかったりします。本号を通じた世代/地域ごとに異なる仮想の夏の邂逅を祈っています。

思惟かね
編集/デザイン

夏は暑いし汗をかくから嫌いです。でも夏の青空、向日葵、夜空の花火。一瞬のエモで全て許しちゃうのがズルい。

みくにき
カメラマン

今年の夏の電気代は2万円オーバーでした。

ヤマノケ
ライター

清少納言は枕草子にて「夏は夜」と語っていますが、「春」の段で抑えていた四季に対する感情が爆発して夏から唐突に早口になる感じ、凄くオタク感があって信頼できますよね。

Tokikaze
カメラマン

息が詰まる日差しと蒸し暑さ。入道雲と夕立。コガネムシの死体。冷たい麦茶。全ては夏が終わってから愛しくなる。不思議ですね。

STAFF 編集長 | Editor Chief
ニツリちゃん

誌面デザイン | Graphic Design
思惟かね

校正 | Proofreading
Nag

執筆 | Writer
わく
ニツリちゃん
ヤマノケ
sun
思惟かね

撮影 | Photographer
Tokikaze
オージュ
ニツリちゃん
ヤマノケ
みくにき
思惟かね
わく(表紙/裏表紙)

2022.10.30

*Our
Journey
Continues...*

Platform

Vol.2 仮想の夏号